

「塩山探検隊」

JN1PYA

間近に迫った団塊世代の定年退職に伴い、第二の人生の受け皿とか言われ、いま田舎が注目されています。また、「田舎に泊まろう」とか「人生の楽園」などというテレビ番組が人気のようです。

行政も過疎化する農業の担い手として、有効な労働力と期待しているようですが果たしてその通りでしょうか。

以下の文章は、ずっと東京暮らしをしていた JN1PYA(村上)が、第二の故郷を探して山梨県に移住した 2001 年から、当時の塩山市ホームページのメールマガジンに連載したものを抜粋し、転載したものです。

第二の故郷探し

それは10年程前。都内世田谷のマンション住まいの私達に「塩山にワインを仕入れている醸造所があるので一緒に行ってみませんか？今はぎっと桃の花がきれいですよ」と、誘ってくれたのはなじみの酒屋のご主人。

中央高速に乗って一時間ちょっとで着いたのは勝沼インターチェンジ。目的地までの途中、勝沼のぶどうの丘に寄って休憩。甲府盆地から塩山を見渡せる景観はまさに桃源郷と呼べる素晴らしさ。

お昼を遅らせて待っていてくれたワイナリーのオーナーは「知り合いの桃畑を頼んでおきましたので」と、フカフカな草が生えた桃の樹の下に私達を案内。

「花見にピッタリです」と爽やかな甘味のフルーティーなワインを開け、急ぎょコンビニで調達したおつまみで、私たちだけの特別なお花見を開いてくれたのであった。

あれから10年。世間で言う定年の年齢にはまだ早いようだが「今のうちに第二の故郷を探しませんか」と言う連れ合いの誘いで、電車に乗って出掛け、再び降り立ったのは山間の緑濃く、太陽を見上げるとクラッとするような真夏の塩山駅だった。

縁があった塩山

目的は第二の故郷探し(時間に不規則な仕事なため、主治医にもゆったりした時間を持つことを薦められてもいたのだが……)。

あてもなく、ただ「塩山に行ってみよう」で、来てしまった二人には、訪ねるところは手近な不動産屋さんしかない。「すみませ〜ん」と店に入ってすぐに目についたのは、桃畑のカラー写真が貼られた物件情報。

色々と希望を言ってから何件かの紹介があり、現地を見ようということになり、駅にも近く眺めも良い住宅造成地に車で連れていってもらったのだが、頭の中はなぜか「……？」。

じゃあ、次を案内しますからと連れて来てもらった土地は、桃畑の間を抜けて突き当たった石垣の上。「ここはもと桃畑、あの山の上にはいつも富士山が見えるんですよ」と言われても、霞がかかって富士は見えない。しかし、両脇を小山に囲まれ、正面に大菩薩連山、なだらな

か傾斜地に民家と果樹園がちりばめられた風景は、都会暮らしの我々には充分すぎるほどの場所。

広さは約七畝、入手には農地転用が必要です。と言われてもチンプンカンプン。教えられるままに手続きを踏んで、数ヶ月後に家を建てる土地が手に入ることになる。

農業見習い誕生

「村上さん、農業やってみないか？」土地を譲ってくださったMさんが契約の時に言われた言葉である。「私にできればぜひやりたいです」。「定年後なんて言わずに若いうちからがいいんだ」。

世紀も改まった年の春まだ浅い3月、質問責めをする農業の見習いが塩山市に一人(連れ合いも入れると二人)誕生したのだった。もちろん、本業とするデザインの仕事も両立させる気持ちで。

家の敷地は桃畑だったので庭は広く、家庭菜園には適しているようだ。教えられるまま「苦土石灰」という粒を撒き、Mさんが運んできたテラー(耕耘機)を運転すると、固い土が掘り返されて、何とか畑のような雰囲気。「畝って分かるかい？」Mさんは白いひもを巻いた背丈ほどの2本の杭を持ってくると、杭を立てて引っ張り、ひもを直線に。それに沿わせてクワを使って土を盛り上げ「ハイ出来た」。

「まあ、春播きの小松菜や春菊から播くんだな」と言われたので、早速近くのホームセンターへ行って種を購入。畝の中心に指で溝を引き、種をすじ状に播いて土をかぶせておいた。

経験ゼロで出発

「小松菜や春菊」と言われたのに、買ってきた種はパセリ、ニンジン、シソ、九条ネギ、コリアンダー。さらに店頭に出ていたキャベツ、レタス、ブロッコリーの苗も実験用と称して購入してきたのだった。

「ずいぶん欲張ったなあ」と言いながらMさんは黒いビニールフィルムを畝に広げて縁に土をかけ、「これがマルチ、丸い穴を開けて苗を植えとけし」。「ネギの種は難しいぞ」と笑っている。

野菜づくりどころか土いじりの経験ゼロの身としては、早く芽を出せの思いで、種を播いた畝にジョウロで毎日水をかけていたのだが、一週間以上たってもさっぱり芽は出ない。Mさんの「彼岸前だし、ちいっと早かったかな」のつぶやきに、こちらは「・・・」。「ま、様子を見よう、水も続けるし」。これでようやく安心。

次の日の朝、畝の上を小鳥が一羽歩いている。何かあるのかなと思い、くちばしでつついていた穴を覗くと、芽の出かかった種を発見。「もう少しで芽が出るぞ」と興奮して話す私に連れ合いは、「種をほじってみれば安心したのにね」。

お百姓さんの知恵

畝にすじ播きした葉菜は次々と双葉を出し、やがて本葉が出た頃にはびっしりと林の有様。

「間引かんとね」「どうやるんですか？」「手で探って指に当たったのを抜くんさ」。何ともファジーな答えだが、あれこれ考えずに済むうまい方法だというのは後で分かった。

「コリアンダー、パセリ、ニンジン近づけて播いたのはまずかったかな、芽が出たら葉っぱが似てるよ」「だから種を播いたら名札がいると言ったでしょ」。花壇で遊んでいるような会話だが、これでも夏に向けて野菜はほとんど買わずに済む、家庭菜園になるのだ。

「ところで生ゴミはどうするんですか？」「そうさなあ、畑に埋めて肥料にするさ。年に一回、市の補助が出るからコンポスト買えばいい」。

そう言えばご近所の畑や庭には緑色のプラスチック容器が伏せて置いてあった。この地域では生ゴミはそこに入れて、有機肥料として土に返す、エコシステムが確立されていることを教えられた。

筍のおみやげ

「お〜い村上さん、タケノコの食べ方知ってるかい？」。Bさんの訪問はいつも突然である。しかもこちらの知識が乏しいおみやげ付きで。

「皮を剥がして、米のとぎ汁でゆでたら、煮付けでもなんでも食べるさ」。入り口にドサッと筍を置くBさんに「刺身では無理ですか？」「いいさ、先の方の柔らかいところがうまいよ」。筍は私の大好物である。少しエグいくらいのを若竹煮でも刺身でも、白ワインでサクサク食べるのが何とも言えない。

一人暮らしと聞いたBさんは何事にも一生懸命である。タラの芽やウドをスーパーの袋一杯にして届けてくれたときは、手を見ると何カ所か血がにじんでいた。「見られちゃ恥ずかしいなあ」と言いながら帰って行く後ろ姿はどこか嬉しそうな雰囲気が漂っていた。

このようなときはどのようにお返しをしたらよいのだろうか。25年以上住み慣れた世田谷では、はたして何人の人とこのような交流を経験したかなあ・・・と考えさせられた隣人の訪問であった。

ワンコインバス

ここから塩山の街に買い物に行くには歩いては無理だ。バスがあるが、朝昼晩5本なのでスケジュールを組んで出掛けることになる。10分足らずの乗車で250円の料金は都内の一律210円と比べて割高だが、乗客数が少ないので納得できる。二人で出掛け、荷物が多い帰りはタクシーで千円少々を払うことになる。

都内では駐車場が無かったので車は持てなかったが、ここでは必需品。早速、小型の四輪駆動車を手にしたが、長年のペーパードライバーである。Mさんが同乗してくれて練習代わりにドライブすること1時間。「うまいじゃん、これなら大丈夫だ」。Mさんの太鼓判は何よりも励みになった。

車で走ると、このあたりでは軽自動車足代わりになっていることがよく分かる。一家に一台、いや一人に一台かも。軽トラックは農家に一台である。

しばらくして塩山市内のバスは一律ワンコインの百円バスが導入された。私も食事に出掛けるときなど利用するが、降りる際に運転手に礼を言っている姿をよく見かける。

郵便ポスト

「村上さん、郵便で～す」。赤いバイクに乗って緑の制服を着た郵便局員がやってきた。偶然、表に出ていたの顔を合わせると、時間の余裕があるらしく「村上さんはどこから越してこられたね」「東京から」「こちらは実家かね」「違います」「じゃ、奥さんの実家かね」「違います」「へ～えなんでまた」「ここが気に入ったから」「・・・」。

宅配便も燃料店の人も、初めてのあいさつは大抵このパターンとなる。引っ越して来るには何らかの縁故があるのが普通のようなのだ。

話の途中に「こんな寂しいところへ」とか「こんな田舎へなぜに」と入ることがあるが、最後は「ま、静かでいいとこじゃんね」と言って帰って行くのでこちらもホッとするのである。

「ところで、ポストはどこにありますか？」「農協と〇〇商店が近いさなあ。でも出すもんあったら郵便受けの上に置いとけし、持ってくよ」。さらに、頼んでおくとハガキや切手も持ってきて、移動販売もしてくれる。郵便物の多い私にとって、これは嬉しいサービスである。

郵便受けの上に置いても良い・・・しかし、雨が降ってきたら困る・・・運動にもなることを考えて、結局往復10分の散歩の方を選ぶことになってしまったのである。

「組」の一員になる

「村上さん、組はどうする？地元の人じゃないから入らんでもかまわんけど」。そうだ「組」のことを忘れていた。農業の主体が稲作だったころ、田植え、稲刈りといった農繁期はお互いに手伝いあった相互扶助の名残りで、冠婚葬祭、回覧板等、隣近所のつきあいが「組」であると、聞かされてはいた。もちろん予備知識はそれだけ。

「こちらに住むので入れてもらえますか？」「そうかえ、じゃ組長に言っとくから」。組長とはなんとも緊張させられる呼び名である。

「今度引っ越してきた村上です、よろしくおねがいします」と、組全員のお宅に挨拶回りをしたのが最初のお付き合い。以来、すれ違おうと声をかけてくれるのは組の皆さんなのだが、なかなか顔を覚えきれない。

「大丈夫さそのうちみんな覚えるよ」と言っていたいたが、実はもっと大変、名前が覚えきれない。

ここの組は比較的にちんまりしていて14軒なのだが、そのうちほとんどは山梨県に多い名字なのである。つまり氏名の氏が同じなので、名前を覚えるしかない。立ち話を終えて連れ合いと歩き出し「ところでどこの人だったか分かる？」「一郎さんの奥さんだった？・・・」。なるほど納得・・・。ここでは花子さん良子さん三郎さんと、お互いに名前を呼び合っている。

桃の蕾のゆくえ

東京で桜が咲いたと報じられてから10日前後、塩山では桜、すもも、桃が次々と開花する。桃は蕾の状態でもピンクが濃く、開花前でも樹と周辺を色づける。桃源郷と呼ばれる春の訪れである。

前日から桃畑に行くことになっていた朝は上天気。「さあこれを持って行くぞ」と渡されたのはなんと、こうもり傘。桃は花の全てが実になると樹がもたないので、あらかじめ収穫量を決めて計画的に実を結ばせるのだが、その第一段階が蕾を摘む「摘蕾」。

こうもり傘を開いて逆さにして枝につり下げ、その中に摘んだ蕾を落として行く。それを集めてミキサーにかけ、花粉を採って、自家受粉しにくい種類の花に、羽はたきや噴霧器で付着させるのが「人工授粉」。やがて桃の実が小さな梅のようになった頃、再び数を調整するために実を落とす。

その後、ピンポン玉くらいになると袋をかけるのだが、その際も劣勢な実を落として行く。そうして出荷される桃は、最初の蕾の数の一割いやその十分の一にも充たないという。わずか100日ほどの間の格闘であるが、もったいない、かわいそう・・・と思いながらこの見習いは作業を手伝っている。